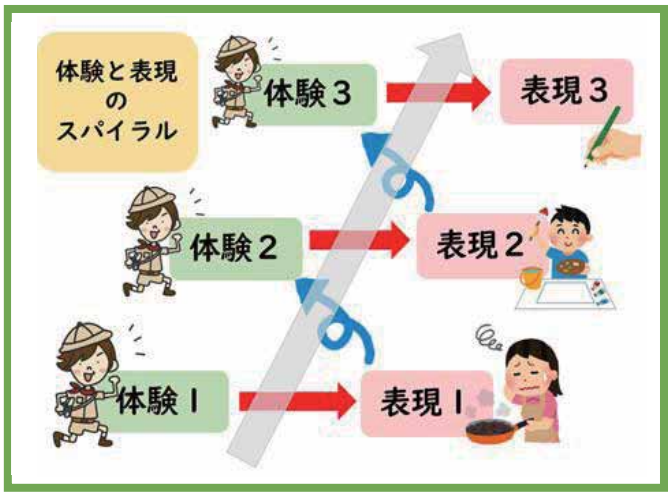
生活科
評価の改善を目指して

具体的な活動の場を想定し一人一人を多面的に見取る

POINT１　３つの観点から，児童のゴールを想像する

生活科では，身近な生活に関わる見方・考え方を生かし，直接体験で得た気付きを表現することにより，その質を高めながら，自立し生活を豊かにしていく資質・能力を育成することを目指しています。評価は，結果よりも結果に至るまでの過程を重視します。

単元を通して，児童にどのような力を付けたいのか，３つの観点から「児童のゴールの姿」を想像し，児童の実態に合わせた学習計画を立てていきましょう。



ゴール
「みんなで朝顔の花をきれいに咲かせよう」
→「早く芽が出るように，水をあげよう」
→「どのくらい？ペットボトル２本分？」
→「あげたら土がぐちゃぐちゃになった！」
→「水をへらしてみようか？」
→「芽が出た！水をへらしたからだね」

教師は，児童の興味関心を踏まえ，児童の活動予想を立て，児童の活動が豊かなものになるよう，学習対象との適切な出会いの場を準備しておくことや，思いや願いがさらに膨らむような学習活動を展開していくことが重要となってきます。

◇「できた」「できない」だけではない！教師は一人一人違うそれぞれの伸びを大切に見取る◇
様々な立場からの評価資料を収集することで，児童の姿を多面的に評価することが可能となります。
①教師による行動観察や作品・発言分析等（授業時間外も含む），②児童の自己評価や児童相互の評価，③ゲストティーチャーや学習をサポートする人，④家庭や地域の人からの情報等

POINT２　児童の学びへの興味を引き出す

低学年においては，児童一人一人の生活環境の違いから，対象に対しての知識量に個人差があります。クラス全体で意見を出し合うことで，対象に対するイメージが膨らみ，自分が知らなかったことも，知っている児童の考えを言語化し，共有していくことで，クラスの共通理解を図ることができます。児童が現在どのくらい対象について知っているかを確認でき，児童にこれからの学習の見通しを持たせることもできる効果的な方法の一つにウェビングがあります。児童は五感を働かせ，対象について言語化し，教師はそれをつないでいくことで，児童の「やってみたい」があふれてきます。

「あめ」がテーマのウェビング

１学年
「みんなであそぼう　はるなつあきふゆ」

生活科実践事例

単元名：「みんなであそぼう　はるなつあきふゆ」
（光村図書１年）

「教師の問いかけ」により，児童の次の活動につなげる。

評価規準（一部抜粋）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
身近な自然を観察したり，自然物を利用して遊んだりする活動を通して，季節の変化に気付いている。	季節の変化や特徴をたしかめながら，身近な自然を楽しんでいる。	季節の変化や自然の不思議さ，自然の中で遊ぶ楽しさ，そして，それらと自分のかかわろうとしている。

雨が降ると地面の土がドロドロするね。

バケツと缶に落ちる雨の音を比べてみよう！

〇〇ちゃんが水たまりをつなげていた。私も一緒にやってみたい！

POINT1　一人一人を多面的に見取る

生活科は児童の自主的な活動が中心になっているため，最終的に「みんな活動は出来ている」という活動自体の評価になってしまい，学びの連続性や指導の系統性が曖昧になっていることが散見される。

年間を通して長期にわたる単元を評価するためには，３つの観点で見取っていくことが大事である。

①分割→統合
小単元における評価規準に基づいて評価し，記録する。その小単元ごとの記録を統合することで，一つの単元の評価とする。
※例　（春の小単元の評価）＋（夏の小単元の評価）＋（秋の小単元の評価）＋（冬の小単元）＝1 単元の評価）

②単元を構成する小単元ごとの評価に重み付けをして，それを集計していく方法。
学習活動やねらいを踏まえ，ここで付けたい資質・能力に重きを置いて，評価をする。

教師の問いかけをきっかけに，対話が生まれ，児童が表現していなかったことを出せるようになる。教師は一人一人違う伸びをここから見取る。①何を②どのタイミングで問いかけるのか，重要である。

授業外の児童の姿も評価対象に！

POINT2　教師の問いかけが児童の秘めた言葉を引き出す

あめとシャワーの音のちがい

アイディアを共有することで，語彙は増えてくる。活動中も教師は一度児童を集めて，今，体験したことをその場で発表させたり，さらに問いかける場を作ったりした。すると，児童は新たな気づきをもつだけでなく，言葉で表現できずにいた気づきを明らかにすることができ，「自分もやってみたい！」という新しい活動への意欲につながった。「傘に当たる雨の音と，シャワーの音は違う！」「本当かな？」と確かめる活動に広がり，新たな発見，気づきを促した。

バケツとゴミ箱に雨水を落とし,音の違いを楽しんでいたが,友達の発表を聞き,小さな水たまりをつなげ，大きな水たまりを作る活動に発展した。